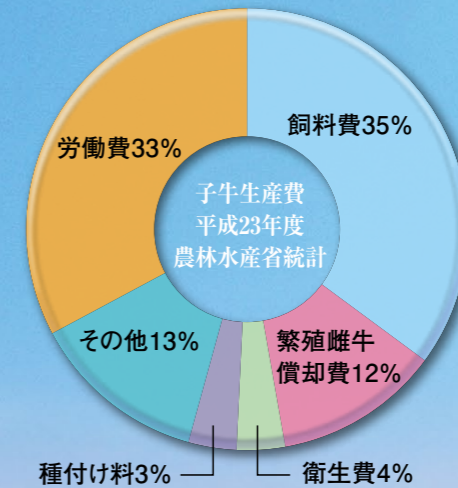


コスト削減の取り組み

CASE STUDY

生産性向上のための優良事例（肉牛）

国内の和牛繁殖頭数は3年前をピークに減少が続く。生産基盤を維持するためには、さらなるコスト削減の努力が求められている。繁殖農家のなかでも一般的な家族経営による中規模の複合農家が、粗飼料の自給生産を中心にコスト削減を果たした例を紹介する。



飼料費が子牛生産費全体の3割以上を占めている



自給粗飼料：年間1000個を超えるラップサイレージ(直径120cm)を集荷

所在地：関東地方
飼養頭数：和牛繁殖雌牛50頭
従業員数：2名

生産費の3分の1を占める粗飼料費

今回登場する農場は、50頭規模の繁殖牛と、水田を所有している家族経営の和牛繁殖農場である。農林水産省の統計によると、子牛1頭を生産するのに、最も費用を占めるのが飼料費であり、なかでも繁殖牛に対する粗飼料費が大きなウエイトを占めている(右ページ円グラフ)。

自給粗飼料の活用

この農場の敷地内にある10haの畑では、スーダングラスやオーチャードグラス、イタリアンライグラスを作付けしている。また、3haの水田では飼料稲(WCS)を育てて、ラップサイレージを生産している。さらに約15haの水田を所有する近隣の稲作農家からは、乾燥稲ワラと稲ワラロールサイレージ(稲刈りの2、3日後に集荷する高水分タイプ)を堆肥と交換する条件で確保している。

この結果、繁殖牛に与える粗飼料の購入費がゼロになった。同時に自給粗飼料の十分な給与により、空腹ストレスを減らすことが可能になり、牛の状態を常に良好に保てるようになった。

一方で、子牛には成分が安定した良質な粗飼料を給与する必要があることから、外部から購入した粗飼料(チモシー)を中心に、稲ワラを追加給与している。この稲ワラは短くカットしたもの、長ワラのままのもの、サイレージの3種類を与え、育成期の腹作りを重視するとともに、肥育農家で肥育される際にスムーズに移行できるように工夫している。

その他のコスト削減策

繁殖牛は繁殖機能が低下しない限り、できるだけ長期間使用し、償却費を抑えるようにしている。具体的には、自分たちの農場で受精卵を年4回程度採卵し、高齢牛や血統の劣る繁殖牛に移植している(現時点で借り腹として利用している繁殖牛は半数程度)。なお採卵する繁殖牛は、子牛を購買する肥育農家から枝肉成績を直接聞き取り、それに育種価や牛自体の状態をチェックしながら決めていく。このことで採卵などに要する費用は増えるものの、購買者が求める優良な子牛の生産が可能になった。

加えて、自分たちの手で牛舎を作ることによって建設費を3分の1程度に抑えている工夫も注目している。自作することで、牛の快適性、人間の作業性を考慮した設計が可能になった。敷料には、近隣の稲作農家から集めたもみ殻を使って、オガ粉の購入費を削減することができている。

販売価格の推移

生産成績については、分娩間隔は1年1産を達成しており、子牛の事故もほとんど発生していない。子牛は4カ月齢まで親牛につける自然哺乳だが、子牛の状態を見ながら人工哺乳に切り替えたり、追い乳で追加哺乳をしたりしている(特に初産の子牛)。

これらの取り組みに加え、頻繁に牛舎に足を運んで牛の状態を確認している。小さな努力の積み重ねによって、コスト削減を図りながら、市場平均と比較しても高いレベルの販売価格を維持している。

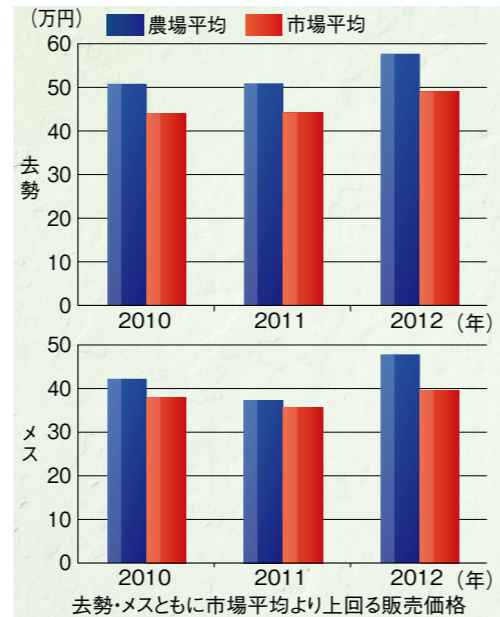
自作牛舎：地域の仲間に協力してもらい自前で牛舎を建設



自家で受精卵移植をしながら繁殖牛を可能な限り使用

もみ殻の活用による敷料費の低減

過去3年間の子牛の販売価格(税込)



去勢・メスともに市場平均より上回る販売価格